HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	実験記録から未決の物語へ ： 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の改稿をめぐって
Author(s)	閻, 慧
Citation	研究論集, 14, 55(右)-70(右)
Issue Date	2014-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57704
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_016_Yan.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

実験記録から未決の物語へ

――宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の改稿をめぐって――

閻　慧

要旨

本稿は宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の改稿に関して考察するものである。周知のように、「銀河鉄道の夜」は、数回の改稿を経ることにより、多彩な容貌を持っているテクストである。その多面性を捉えるため、各次稿の間の改稿過程をどのように受け止めるかは、無論重要な問題となる。従来の研究においては、「銀河鉄道の夜」の改稿問題が焦点となっているもののうち、初期形〔三〕と後期形との間に行われる改稿を中心に論じるのが圧倒的多数である。つまり、テクストの初期形〔一〕から初期形〔三〕までに行われる改稿はこれまで看過されたきらいがある。そこで本稿では、新校本全集に収録された「銀河鉄道の夜」のテクストを参照し、まず初期形内部の変容を把握し、ついで初期形から後期形までの改稿について考察する。

まず、初期形〔一〕と〔二〕の特徴について考えてみる。両者において、質的な差異は殆どない。ブルカニロ博士の全能性と実験という枠組みに注目すれば、初期形〔一〕と〔二〕をブルカニロ博士の実験記録として見なすことができる。次に、初期形〔二〕から初期形〔三〕まで、作中の現実世界に関する加筆に注目し、ジョバンニを苦しめる現実状況および彼が持っている逃走願望を読み取る。そこで、ジョバンニが焦点化されることによって、初期形〔三〕を彼の逃走物語として読むことができる。続いて、後期形における労働するジョバンニの設定が誘発した鳥捕りとの関係の変化、またジョバンニの父の帰還とカムパネルラの水死についての改稿を中心に、分析を行う。それによって、変容する後期形の姿が明らかになり、ジョバンニの行方の未定着によって、「銀河鉄道の夜」という作品の未決性が見出される。

以上のように、「銀河鉄道の夜」が実験記録から未決の物語までの改稿プロセスを考察する。それと同時に、初期形〔一〕から後期形まで貫通している、ジョバンニの切符、金貨、牛乳などのモチーフの役割・意味についても吟味する。「銀河鉄道の夜」の物語に潜在する未決性、また共通するモチーフの多義性の分析によって、新しい読み方を示唆する。

1　はじめに

「銀河鉄道の夜」は、ほぼ十年間にわたって改稿を重ね続けられた、複雑なテクスト推移の様相を呈する作品である。本作品は、賢治の死によって未完成のままに残され、一九三四年文圃堂版賢治全集の出版により、はじめて活字化された。その後、一九三九年に出版された十字屋版全集、また筑摩書房が一九五六年と一九六七年に行われた賢治全集の二回の編集を経て、いままでの本文変遷の主なプロセスが示された。一九七〇年と一九七三年、天沢退二郎と入沢康夫両氏は充分な時間をかけ、「『銀河鉄道の夜』とは何か」というテーマを巡って、二回の対談を行った。この対談をきっかけに、両氏による原稿調査は、まず一九七四年の『校本宮沢賢治全集』の刊行によってその成果が公となり、さらに、一九九五年の『【新】校本宮沢賢治全集』[1]においては、「第一次稿」から「第四次稿」までの四段階のテクストが活字化された。

原稿の現状から推定される四次稿の成立順序によれば、初期形〔一〕から後期形までに行われた七段階の推敲は次のようになる。それぞれの推敲過程は①～⑦の順に表記する[2]。

①鉛筆による下書きの完成　→初期形〔一〕（第一次稿）
②ブルーブラックインクによる手入れ　→初期形〔二〕（第二次稿）
③青インクによる一部清書　→初期形〔三〕（第三次稿）
④鉛筆による大幅の手入れ
⑤ブルーブラックインクによる一部再清書　→後期形（第四次稿）
⑥鉛筆による手入れ
⑦黒インクによる手入れと改編

新校本全集の刊行によって、各次稿が独立のヴァージョンとして吟味することが可能になったのは紛れもない事実である。ただし、ここで更に注意すべきなのは、四次稿を独立なものとして考える際にも、右の推敲過程によって形成された四次稿は一つの流れでつながり、切断することができない、ということである。「銀河鉄道の夜」の改稿推移は、いくつか重要なシークェンスと要素を組み合わせることによって表示することができる。

A：銀河鉄道の乗車風景
B：検札、青年と姉弟の乗車理由（海難）
C：銀河祭
D：ジョバンニの内的独白
E：午後の授業、活版所、家

F：実験告知
G：カムパネルラの水死、カムパネルラ父の登場

初期形〔一〕：A＋F
初期形〔二〕：B＋初期形〔一〕
初期形〔三〕：C＋D＋初期形〔二〕
後期形：E＋（初期形〔三〕－D－F）＋G

初期形〔一〕から後期形までの対応関係は、右のように、整理することができる。「銀河鉄道の夜」を考察する際に、各次稿の形成の間の改稿過程をどのように受け止めるかは、避けがたい問題となる。ところが、従来の研究においては、「銀河鉄道の夜」の改稿問題が焦点となっているもののうち、初期形〔三〕と後期形との間に行われる⑦の手入れを中心に論じるのが圧倒的多数である。だが、松澤和宏が指摘したように、「初期形内部での変容、すなわち④、⑤、⑥の改稿による初期形二から初期形三にかけての変化がこれまで看過されてきたきらいがある」[3]。

そこで本稿では、新校本全集に収録された「銀河鉄道の夜」のテクストを参照し、松澤の指摘に注意を払い、まず初期形〔二〕から初期形〔三〕までの変容を把握し、ついで初期形〔三〕から後期形までの改稿について考察することにしよう。

2　初期形〔一〕、〔二〕とは何か

現存する原稿八三枚のうちに、初期形〔一〕に組み込まれる原稿はわずかに十五枚しか残されていない。前半のうち大部分の原稿がないことを承け、初期形〔一〕の冒頭では、ジョバンニ、カムパネルラ、女の子と弟、青年らはすでに、現実空間から離れ、直接に銀河鉄道の幻想世界に登場する。ジョバンニを代表とする銀河鉄道の乗客たちは、青い橄欖の森を過ぎ、銀河鉄道の旅を続ける。海豚の登場がもたらす汽車が海の中を走っているかのような錯覚、きらきら燃えて光っているとうもろこしの木の葉が作り出す夢幻感覚の現れ、さらに「白い鳥の羽根を頭にかざりたくさんの石を腕と胸にかざり小さな弓に矢を番へて一目散に汽車を追って来る」[4]インディアンの登場など、不可思議で神秘感が溢れる雰囲気が作り出される。このような旅は姉弟と青年たちが降りたサウザンクロスまで続き、その直後ジョバンニはついにカムパネルラの消失を迎える。一人でも「ほんたうの幸福が何だかきっとさがしあてるぞ」と決意したジョバンニは、セロのような声が聞こえ、次いで銀河鉄道の旅が実験だったことはブルカニロ博士によって明らかに語られる。ただ、結末で、「博士ありがたう、おっかさん。すぐ乳をもって行きますよ」[5]と叫んで走りはじめたジョバンニの行為は、彼が日常生活を送っている現実世界の存在を提示するばかりで、そこで物語を終らせる。このような結末における、ジョバンニの母と切符、また二枚の金貨の唐突な出現は、初期形〔一〕の段階では、解明できない問題として残さ

れている。

初期形〔二〕では、青いインクの清書が初期形〔一〕の前に加えられたが、全体的な容貌は初期形〔一〕と殆ど同じである。ところが、初期形〔二〕における、いくつかの加筆の箇所には注目すべきだと思われる。まず、初期形〔二〕の冒頭部分において、ジョバンニは車掌から検札を求められる。切符に関するこの加筆は、ジョバンニが三次元の現実世界から来たことを提示しながら、結末で、彼の現実世界への回帰を示唆する。

また、初期形〔二〕では、青年と姉弟が銀河鉄道に乗る理由、つまり海難に遭遇する内容が配された。海難事件の経緯を聞き、涙を流しているジョバンニが、自分の家族のことを思い出す内容も加筆されている。

（あゝ、あの大きなパシフィックの海をよこぎらうとして、この人たちは波に沈んだのだ。そして私のお父さんは、その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかって、僕に厚い上着を着せやうとしたのだ。それを心配しながらおっかさんはあの小さな丘の家で牛乳を持ってゐらっしゃる。僕は帰らなけぁいけない。けれどもどうしてここから帰れやう、いったい家はどっちだらう。）ジョバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまひました。

「もう帰りたくなったって。そんなにせかなくてもいゝ。まだ二分もたってゐない。まあ安心しておいで。いつでもその切符で帰れるから。」またあのセロのやうな声がどこかでしました。[6]

この加筆の結果、初期形〔一〕と共通している結末では、ジョバンニが急いで家に戻る理由、また彼自身が家に帰ろうと思っている、自発的な意志を持つことが明らかになった。

以上の二箇所の加筆によって、初期形〔二〕における切符というモチーフの重要性が出てきた。

「あゝではさよなら。これはさっきの切符です。」博士は小さく折った緑いろの紙をジョバンニのポケットに入れました。そしてもうそのかたちは天気輪の柱の向ふに見えなくなってゐました。ジョバンニはまっすぐに走って丘をおりました。そしてポケットが大へん重くカチカチ鳴るのに気がつきました。林の中でとまってそれをしらべて見ましたらあの緑いろのさっき夢の中で見たあやしい天の切符の中に大きな二枚の金貨が包んでありました。[7]

初期形〔二〕の結末では、ジョバンニが切符に包まれる二枚の金貨を入手する。初期形〔一〕では意味不明の切符は、恐らくブルカニロ博士の実験が始まる前に、実験協力者のジョバンニに配られた、つまり、彼を他の乗客と見分けるためのしるしの意味を持っていた。このジョバンニが特別視されていることについて、また後述しよう。

以上の分析によれば、初期形〔一〕と〔二〕において、質的な差異は殆どないと言えるが、初期形〔一〕から初期形〔二〕までの変

容から、幻想世界と現実世界はジョバンニの切符によって結びつけられていることは明らかであろう。また、結末にジョバンニに与える二枚の金貨は、実験協力者としての彼に対するお礼だと見なすことができる。さらに、もう一つ注目すべきことがある。初期形〔一〕、〔二〕の主な内容は、ジョバンニと青年、姉弟をめぐって語られるが、これらの銀河鉄道の乗客を操作するのはブルカニロ博士である。

「ありがたう。私は大へんいゝ実験をした。私はこんなしづかな場所で遠くから私の考を人に伝へる実験をしたいとさっき考へてゐた。お前の云った語はみんな私の手帳にとってある。さあ帰っておやすみ。お前は夢の中で決心したとほりまっすぐに進んで行くがいゝ。そしてこれから何でもいつでも私のとこへ相談においでなさい。」[8]

このように、ブルカニロ博士は、ジョバンニの銀河鉄道の旅が実験であったということをジョバンニに明らかにする。ブルカニロ博士の全能性に注意を払うと、初期形〔一〕と〔二〕における、ブルカニロ博士の実験という枠組みの重要性が浮上する。この実験の枠組みを重視すれば、初期形〔一〕と〔二〕は、彼が語る実験報告として見ることができるだろう。さらに、初期形〔三〕では、ジョバンニが降車する前、黒い大きな帽子をかぶる大人が一冊の本を持つ姿が表れる内容が加筆される。本の中に実験方法の強調、またそこに書かれた地理と歴史についての記録は、ブルカニロ博士の実験内容を記録する手帖と重なると考えられる。初期形〔三〕におけるこのような加筆は、初期形に貫通するブルカニロ博士の実験という枠組みを改めて明示する。

ただし、先ほど言及したジョバンニが持っている自発的な意志の生成をはじめ、初期形〔三〕になると、ジョバンニは全能のブルカニロ博士に従うのではなく、自発的に物事を多く考える人物となる。初期形〔三〕におけるジョバンニに関する大幅な改稿は、「銀河鉄道の夜」のジョバンニの物語への転向を導くのである。それで、次章では、ジョバンニの変容は本格的に重要視されるべき問題として扱おう。

3　初期形〔三〕――ジョバンニの物語の生成

初期形〔二〕に対して、初期形〔三〕では④の、鉛筆での大幅な手入れがなされている。無論、④の改稿には重大な意味がある。それを説明する前に、まず初期形〔一〕、〔二〕から初期形〔三〕にかかる改稿の内容から確認していこう。

初期形〔一〕、〔二〕とは異なり、初期形〔三〕の冒頭には「ケンタウル祭の夜」という一章が位置している。祭りという特別な日であるが、現実世界の風景の描写が冒頭部分のメインとなる。結末の部分を先に確認すれば、初期形〔三〕は全体的には、ブルカニロ博士の実験という枠組みを持っており、実験参加者としてのジョバンニおよび彼と関係する人物が、重点的に描かれている。このことは

初期形〔三〕の冒頭から確認することができる。

ジョバンニのお父さんは、そんならっこや海豹をとる、それも密猟船に乗ってゐて、それになにかひとを怪〔我〕させたために、遠くのさびしい海峡の町の監獄に入ってゐるといふのでした。ですから今夜だって、みんなが町の広場にあつまって、一諸に星めぐりの歌をうたったり、川へ青い烏瓜のあかしを流したりする、たのしいケンタウル祭の晩なのに、ジョバンニはぼろぼろのふだん着のままで、病気のおっかさんの牛乳の配られて来ないのをとりに、下の町はづれまで行くのでした。[9]

楽しそうな祭りの時間を過ごしている人たちと比べ、父が入獄しているという事実を負いながら、病気の母のために奔走しているジョバンニの大変な家庭状況が示されている。このように、初期形〔三〕におけるジョバンニの内的独白が加筆され、多感で内省的なジョバンニの人物像が浮かび上がる。ジョバンニがこのようになった理由は、主に家族状況と学校の人間関係という二つの面にあると推測できる。

一方、引用で示したように、ジョバンニの父は不在であり、彼にとっての精神的な支えが欠如している。また、級友のザネリが「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ」と投げつけるように言われることで、ジョバンニはどのように対応していいかがわからず、狼狽してしまう。級友にからかわれる悩みは、明らかに不在の父と関わると考えられる。それと同時に、重病の母の世話はジョバンニ一人の身に課され、いろいろと苦労させる。加えて、銀貨が一枚さえほしいというように、経済状況の困窮を表す内的独白が加筆される。それで、ジョバンニはお金を稼ぐため、勉強と仕事を両立しなければならない状況に陥っている。

もう一方、学校ではジョバンニと級友たちの関係も打ち解けていない。学校で誰とも遊ばず、たったひとりになってしまう孤独なジョバンニの姿が描かれ、ザネリにからかわれるのも明らかである。さらに、優秀で賢い級長であるカムパネルラと友達になることを、ジョバンニは強く望んでいる。しかし、このような憧れこそ、ジョバンニとカムパネルラの間に、実際に存在する距離感を示唆するのである。

このような厳しい現実に直面するジョバンニは、強い逃走の願望を持っている。

（ぼくはもう、遠くへ行ってしまひたい。みんなからはなれて、どこまでもどこまでも行ってしまひたい。それでも、もしカムパネルラが、ぼくといっしょに来てくれたら、そして二人で、野原やさまざまの家をスケッチしながら、どこまでもどこまでも行くのなら、どんなにいいだらう。カムパネルラは決してぼくを怒ってゐないのだ。そしてぼくは、どんなに友だちがほしいだらう。ぼくはもう、カムパネルラが、ほんたうにぼくの友だちになって、決してうそをつかないなら、ぼくは命でもやってもいい。けれど

もさう云はうと思っても、いまはぼくはそれを、カムパネルラに云へなくなってしまった。一諸に遊ぶひまだってないんだ。ぼくはもう、空の遠くの遠くの方へ、たった一人で飛んで行ってしまひたい。）[10]

このように思っているうちに、野原から汽車の音が聞こえ、ジョバンニはいつの間にか銀河鉄道の旅を始める。この流れから考えてみれば、初期形〔三〕に描かれる銀河鉄道の旅は、ジョバンニの現実世界からの逃走の旅だと理解することができよう。

それでは、ジョバンニの逃走の旅はどのような結末を迎えるのだろうか。銀河鉄道の旅を経験したジョバンニおよび彼の人間関係は、どのように変化していくのだろうか。まず、旅の中で、ジョバンニとカムパネルラとの関係の変化から見ていこう。

初期形〔三〕におけるカムパネルラは、頭も人間関係もよく、級長の設定である。引用からジョバンニのカムパネルラに対する憧れの感情が明白に読み取られる。しかし、一見学校でクラスメートたちに尊敬され、みんなと仲良くしているカムパネルラだが、他人がうらやむ生活の陰には、ジョバンニと同じように、悩みを抱いているのだ。

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」

いきなり、カムパネルラが、思ひ切ったといふやうに、少しどもりながら、急きこんで云ひました。

［…］

「ぼくはおっかさんが、ほんたうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだらう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえてゐるやうでした。[11]

乗車中、カムパネルラが母から許しがもらえるかどうかについて、ジョバンニに話かける。このように、そもそも自分にとって遠い存在であるカムパネルラと、一緒に銀河鉄道の旅を経験するジョバンニは、カムパネルラの悩みを知るようになり、その後、みんなの幸福を共に探していくと約束する。これで、銀河鉄道の旅の前に、ジョバンニが望んでいたカムパネルラと友達になることは、お互いに情報の共有により実現の可能性が高まるだろう。ただし、旅の最後に、カムパネルラの姿が消えるのだ。この設定について、次章で後期形と対比しながら、また言及しよう。

次に、ジョバンニの家族の問題を考える。初期形〔三〕において、ジョバンニの悩みと深く関わる父の問題を解決するのは、入獄中の父の帰還ではない。その代わりに、ブルカニロ博士が現われ、「これから何でもいつでも私のとこへ相談においでなさい」とジョバンニに伝える。無論、ジョバンニにとって、父の不在は、ブルカニロ博士の出現によって穴埋めできるものではない。しかし、銀河鉄道の旅、つまり実験に参加する前に、ジョバンニが直面する孤立無援の状況に比べると、ブルカニロ博士という頼りになる人の存在は、彼

の精神上の負担の幾分かを軽くするだろう。

さらに、初期形〔一〕、〔二〕と同じように、ジョバンニは最後に二枚の金貨を得るようになる。金貨の獲得のエピソードは初期形〔一〕から初期形〔三〕までに共通しているが、初期形〔三〕では、金貨はブルカニロ博士からの実験協力のお礼としてだけではなく、そこに現実的な意義がはじめて浮かび上がる。なぜなら、初期形〔三〕では、ジョバンニはこの二枚金貨の獲得によって、母のために牛乳を買うことができ、ゆえに勉強と仕事の両立、また生活の窮状をある程度は緩和できると推測できるからである。苦しい現実から逃走したかったジョバンニは、銀河鉄道の旅を経験してから、現実世界に戻ると同時に、彼を苦しませる問題が解決される。これで、初期形〔三〕ではジョバンニの逃走願望は解消され、最終的にはハッピーエンディングへと収束すると言えよう。

4　変容する後期形

しかし、「銀河鉄道の夜」後期形は、このような円満な結末を否定した。後期形で行われる改稿は、初期形〔三〕までに形成された物語の構造に大きな変化をもたらした。本節から、初期形〔三〕から後期形までの改稿について検討しよう。

4–1．ジョバンニと鳥捕りとの対照関係

後期形における改稿は、まず冒頭と結末の部分で行われている。冒頭部分「午後の授業」、「活版所」、「家」という三章が加筆され、日常生活を送っているジョバンニが登場する。

授業のあと、ジョバンニは家に帰らず、活版所に行き、活字を拾う仕事をする。そこでは、「『よう、虫めがね君、お早う。』と云ひますと、近くの四五人の人たちが声も立てずこっちも向かずに冷くわら」う。このような冷たい待遇に遭ったジョバンニは、文句を言わずに、「何べんも眼を拭ひながら」、活字を拾う。仕事を終え、銀貨をもらった彼は顔色がよくなって威勢よくおじぎをし、活版所から飛び出して家に帰る。疲れているジョバンニは家に帰っても、あまり休めず、まもなく母のために牛乳をとりに行く。体が弱い母のために奔走するという設定は、初期形〔三〕とほぼ同じであるが、そこに登場するような青白い、元気がない少年ではなく、後期形においては、ジョバンニは疲れながらも苦境に耐え、積極的に仕事と母の世話をすることを努める少年となる。

加えて、後期形の結末では、ブルカニロ博士は登場しない。つまり、初期形の、ジョバンニは理由がよくわからないまま、幻想世界の旅の後、博士から礼金をもらえるという状況とは異なり、後期形におけるジョバンニは、自分の労働によって、お金を稼ぎ、ブルカニロ博士の経済上の支援から独立する。このように考えてみれば、他人に依存するジョバンニから、自立するジョバンニまでの変容は、初期形〔三〕から後期形にかけての一つの反転だと思われる。

しかも、ジョバンニ自身のこの反転は、銀河鉄道の旅人のもう一人――鳥捕りと対照しながら描かれたと考えられる。初期形〔一〕

と初期形〔二〕において、鳥捕りはほとんど存在感を持っていない登場人物である。このような得体の知らない鳥捕りは、初期形〔三〕と後期形においては、鳥を捕まえる商売人として登場し、同時にジョバンニの感情を波立たせる登場人物としての役割を果たしているのだ。なぜそうなったか。少し具体的にみよう。

ジョバンニはなんだかわけもわからずににはかにとなりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。鷺をつかまへてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびっくりしたやうに横目で見てあはてゝほめだしたり、そんなことを一一考へてゐると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持ってゐるものでも食べるものでもなんでもやってしまひたい、もうこの人のほんたうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立って百年つゞけて立って鳥をとってやってもいゝといふやうな気がして［…］

「僕はあの人が邪魔なやうな気がしたんだ。だから僕は大へんつらい。」ジョバンニはこんな変てこな気もちは、ほんたうにはじめてだし、こんなこと今まで云ったこともないと思ひました。[12]

鳥捕りが再度列車から突然に消失してから、ジョバンニの鳥捕りに対する同情が描かれている。鳥捕りの突然の消失に対し、ジョバンニとカムパネルラは、まず鳥捕りの行方について疑問を持ち、その後「一体どこでまたあふのだらう」と想像する。二人はこのように予感できるのは、鳥捕りが列車から消失し、また列車に戻ってくる往復移動を、二人は一度見ていたからである。しかし、このような予感を感じた直後に、ジョバンニは鳥捕りが邪魔であることがもたらすつらさをカムパネルラに語る。このような気持ちを一体どのように理解すればよいのだろうか。これより先に浮かび上がるのは、鳥捕りはどのような人物なのかという問題である。

従来の研究では、鳥捕りを銀河鉄道における不思議な存在として扱い、そのモデルを盛んに探し出そうとしてきた。中村文昭は鳥捕りを「救われない魂」とし、「粗暴で他人に対するおもいやり、優しさに欠ける異教徒」であるザネリに相当するものと評する[13]。吉江久弥は、セロの声を中心に考察を行い、「鳥捕りが、学者風の痩せた人がそうであったように、ブルカニロ博士の別の姿」だと主張する[14]。また、別役実の論では、ジョバンニの父が北の海でラッコの猟をしているかもしれないということに留意し、動物を狩るという職業の共通性に注目し、鳥捕りがジョバンニの父親の分身となるものだと主張する[15]。これらの見解は、それぞれの視点で鳥捕りの特徴を捉えている。だが、ジョバンニが鳥捕りに抱く、相反する感情に注目すれば、ザネリ、ブルカニロ博士、父へのいずれの感情とも完全に一致しない。では、ジョバンニの鳥捕りに対する感情をどのように理解すればよいだろうか。まず鳥捕りはどのような存在かについて考えてみよう。

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切さうな、大人の声が、二人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外套を着て、白い巾でつつんだ荷物を、二つに分けて肩に掛けた、赤髯のせなかのかがんだ人でした。

「えゝ、いゝんです。」ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。その人は、ひげの中でかすかに微笑ひながら、荷物をゆっくり網棚にのせました。［…］

赤ひげの人が、少しおづおづしながら、二人に訊きました。

「あなた方は、どちらへ入らっしゃるんですか。」［…］

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまへる商売でね。」[16]

鳥捕りが登場する場面である。ジョバンニたちに話をかける時、恐縮しながら、声が親切である。加えて行動の丁寧さと微笑みの様子は、先行研究における残酷な殺生のイメージ[17]と結びつかない。言動が慎重な鳥捕りは商売の仕事に携わる。ジョバンニとの会話の中に、「毎日注文があります」という内容があるが、鳥捕りが忙しく働いていることが推測できる。しかし、その一方、ぼろぼろの外套を着ている状況から、彼の生活は経済的に裕福ではないことも考えられる。このような鳥捕りの存在は、経済的に苦しみ、お金を稼ぐために一所懸命に活版所に通い、働くジョバンニを彷彿させるだろう。つまり、〈労働―賃金〉という交換関係の共通性から、鳥捕りとジョバンニとの照応関係が明らかに現われる。

しかしながら、鳥捕りとジョバンニとの共通性が描かれる一方、両者の差異も提示されている。後期形の冒頭に、銀河鉄道の乗客たちが検札を要求される場面を思い出そう。ジョバンニが持っている切符を、鳥捕りは「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんたうの天上へさへ行ける切符だ。天上どこぢゃない、どこでも勝手にあるける通行券」[18]だとびっくりする。鳥捕りは列車で銀河の野原の間を往復し鳥を捕る人物である。つまり、鳥捕りはある閉鎖空間に囲まれ、そこから逃げ出すことができない。それに対して、ジョバンニは「どこにも勝手にあるける」切符を持っている。鳥捕りのびっくりする反応から、彼のジョバンニに対する羨ましさが読み取られる。このように、境遇が共通である二人の異なる運命が示唆される。つまり、ジョバンニにとっては、銀河鉄道の旅は〈どこまでも行ける〉旅であり、鳥捕りにとっては、この旅は〈どこまでも行けない〉旅ということである。

しかし、鳥捕りはジョバンニが持っている切符の特別さを十分に認識できるのに対して、ジョバンニはそれを認識できていない。苦しい現実から銀河鉄道の旅で逃走したいジョバンニは、自分の境遇と似ている鳥捕りと出会うことで、これからも彼のように永遠に〈労働―賃金〉という関係性に囚われ続けるのではないかと、自分の未来に対する不安を連想する。これが、恐らくジョバンニが鳥捕りのことを邪魔のように感じる理由であろう。

これで、初期形〔三〕と後期形におけるジョバンニの鳥捕りに対

する感情の違いが生じてくる。初期形〔三〕において、ジョバンニの経済的な困窮を解決するため、ブルカニロ博士から金貨をもらえるエピソードが設定される。それに対して、同じく困窮する鳥捕りは、自力でお金を稼がなければならない。後期形になると、ジョバンニと鳥捕りとの対応関係は、活版所で労働するジョバンニについての加筆によって明らかになる。つまり、ジョバンニの鳥捕りに対する同情は、単に他者に対するものではなく、自分自身に対する感情も含まれているだろう。また、邪魔のような感情について、カムパネルラとは関わるため、次節でカムパネルラについての改稿を確認してから、また言及しよう。

4-2．カムパネルラの水死に遭う

では、後期形におけるカムパネルラに関する改稿は、どのような影響をもたらしたのだろうか。

初期形〔三〕においては、ジョバンニのカムパネルラに対する憧れは明らかであり、銀河鉄道の旅は二人が親密関係を結ぶ旅として理解することができる。しかし、後期形の改稿によって、二人の関係は冒頭に加筆される「午后の授業」から変化し始める。

後期形では、カムパネルラは級長の設定ではなく、特に有能性も持たず、普通の子として登場する。ジョバンニが答えられない質問に対して、先生はカムパネルラを指名し、答えを求める。しかし、先生の質問を聞き、すぐ手をあげたカムパネルラも、もじもじ立ち上ったままやはり答えることができないのだ。

> 僕は知ってゐたのだ、勿論カムパネルラも知ってゐる、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書〔斎〕から巨きな本をもってきて、ぎんがといふところをひろげ、まっ黒な頁いっぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈もなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云はないやうになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がってわざと返事をしなかったのだ、さう考へるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあはれなやうな気がするのでした。[19]

このジョバンニの心理描写から、彼にとって、カムパネルラは自分の幼い時期からの友達であることは明らかである。しかし、このような親密な関係はジョバンニにとっては自明なことであっても、カムパネルラは、二人の関係の親密さに対して、確信を持っていなかったかもしれない。なぜなら、それはこのごろのジョバンニが、「朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云はないやうになった」からだ。また、授業の後、みんなが星祭のために集り、相談するときも、ジョバンニはそれに参加せず、仕事先に行くため急いで学校

から出るのだ。つまり、カムパネルラが見ているジョバンニは、幼馴染みの友人として、確かに冷たかったのである。

後期形では、このように、それぞれ異なる認識を持っているジョバンニとカムパネルラであったが、銀河鉄道の旅の中で、カムパネルラは自分の悩みをジョバンニと語り合い、どこまでも一緒に行こうと約束する。これらの内容は初期形〔三〕とほぼ同じだが、後期形の前半に設定される二人の関係から見れば、この銀河鉄道の旅は、ジョバンニとカムパネルラにとって、お互いの考えを理解するためのコミュニケーションの旅だと見なすことができるだろう。ただ、意気投合した二人でも、最後は別れることで旅を終える。現実世界に戻ったジョバンニは、カムパネルラの水死を知る。自分にとって重要な友人との死別は、ジョバンニに悲しみを感じさせるだろう。

これで、初期形〔三〕から後期形にかけて、カムパネルラに関わるいくつかの変容が理解できる。

まず、ジョバンニとカムパネルラの離別について。後期形における両者の死別は、初期形〔三〕におけるカムパネルラとの死別が明示されていない離別と対比することによって、その強度が強まったことは明白である。しかも、それは後期形に突然に生じた変化ではない。初期形末尾の原稿を確認すると、そこに「カムパネルラをぼんやり出すこと、／カムパネルラの死に遭ふこと、／カムパネルラ、ザネリを救はんとして溺る。」[20]という構想メモが残されている。つまり、初期形の早い段階から、後期形のような永遠の別離が構想されている。

次に、ジョバンニが鳥捕りに対する感情について。初期形〔三〕では、ジョバンニが鳥捕りについて邪魔のように感じるのは、ジョバンニのカムパネルラに対する憧れに関わっている。前述のように、初期形〔三〕における銀河鉄道の旅は、ジョバンニとカムパネルラが親密関係を結ぶ旅として理解することができる。ジョバンニにとって、そもそも遠い存在であるカムパネルラとの間に、親密関係を築いたばかりだが、その関係が壊される不安をもたらすのは、カムパネルラと頻繁に会話する鳥捕りである。このような鳥捕りに対して、ジョバンニは邪魔のような嫌悪感を持つようになる。しかし、後期形においては、ジョバンニとカムパネルラは幼馴染みの設定であり、しかもジョバンニは二人の関係の親密さに確信を持っていると考えられる。ゆえに、ジョバンニの鳥捕りに対する嫌悪感は、鳥捕りが自分とカムパネルラとの関係を壊す恐れがあるからではない。前節で述べたように、その邪魔のような感情は、ジョバンニが苦しい現実から逃走できないという、鳥捕りがもたらす不安から生まれたと思われる。言い換えると、ジョバンニの未来に対する不安は、鳥捕りに対する感情に直接に影響していると考えられる。

4－3．ジョバンニの家族の物語

後期形における重要な改稿は、もう一つ存在する。ジョバンニはカムパネルラの父と出会うことによって、自分の父がもうすぐ帰ってくることを知るようになる。初期形〔三〕においてジョバンニの父が帰らないことに対し、後期形のジョバンニの父がもうすぐ帰っ

てくるという設定は、更なる物語の変容を想像させる。ジョバンニの父の帰還は、後期形の結末に突然に現われるものではなく、前半の改稿ですでに暗示されている。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきっと間もなく帰ってくると思ふよ。」

「あゝあたしもさう思ふ。けれどもおまへはどうしてさう思ふの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあったよ。」

「あゝだけどねえ、お父さんは漁へ出てゐないかもしれない。」

「きっと出てゐるよ。お父さんが監獄へ入るやうなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかひの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかはるがはる教室へ持って行くよ。[21]

初期形〔三〕における明白な入獄の設定に対して、後期形では、母の「お父さんは漁へ出てゐないかもしれない」という一言によって、ジョバンニの父の行方は曖昧になってしまう。同時に、後期形に存在するジョバンニの父という空白も生まれる。これに対応するのは、後期形の結末にカムパネルラの父が登場することである。カムパネルラの父は、ジョバンニの父から元気な便りが届いたことを語り、ジョバンニの父の帰還を予告する。ここで、初期形に連続的に登場するブルカニロ博士の姿は完全に消え、実験という枠組みが崩れる。このように、「銀河鉄道の夜」はブルカニロ博士の実験報告から、ジョバンニの物語へと変容し、さらにジョバンニの家族の物語として読めるようになる。しかも、中心となるのはジョバンニの母であるということが考えられる。後期形の冒頭加筆部分から、ジョバンニが苦労するのは母のためであるが、結末にジョバンニの父の回帰は、ジョバンニの母にとって、精神上の癒しとなるだろう。

また、母の重要性は牛乳というモチーフにも深く関わっている。初期形〔三〕では、牛乳を取りに行くジョバンニは、「ちゝ、今日はもうありませんよ」[22]と言われる。そして、ジョバンニは病気のお母さんのために牛乳が必要だと強調しても、「ありませんよ。お気の毒ですけれど」[23]と再度言われる。しかし、後期形では、状況が変わるのだ。牛乳を取りに行くジョバンニは、同じく牛乳がない状況に変わりはないが、「もう少したってから来てください」[24]と、希望が与えられる。銀河鉄道の旅の後、再度牛乳屋を訪れた時、牛乳がジョバンニに渡されるのだ。これで、ジョバンニの母は、父の帰還という精神上の癒しを得ると同時に、牛乳という栄養品の入手によって、肉体的な病の癒しも得られるようになる。このように、「銀河鉄道の夜」後期形は、ジョバンニの病気の母が、牛乳の入手と父の帰還によって回復するという結末を予感させる物語となる。

それに対して、友人の水死と父の帰還を同時に引き受けるジョバンニは、複雑な気持ちを持つようになるだろう。後期形の最後は、

「ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云へずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせやうと思ふともう一目散に河原を街の方へ走」[25]る。家路を急ぐ様子が描かれたが、実際に家に着いたかどうかは宙吊りの状態である。このような結末は、ジョバンニの行方の未決性を浮上させる。

5　おわりに——ジョバンニの行方

「銀河鉄道の夜」後期形の結末について、いくつかの重要な指摘が存在する。まずは、天沢退二郎と入沢康夫両氏が、後期形の父の帰還を重視し、ジョバンニが最終的に家に帰ると主張し、それはある種のハッピーエンディングになると述べている[26]。これは大多数の論者に共通する見方である。それに対して、押野武志は、このような結末から、語ることへの期待、また書くことの始まりの予感を読み出し、「銀河鉄道の夜」の終りは、「オイディプス的な葛藤の物語の始まりであるとみなすこともできる」[27]と指摘した。さらに、別役実が主張したように、ジョバンニは「カムパネルラの父親と別れ、牛乳びんを持ったまま、病身の母がいる家へ帰らず、停車場から汽車に乗ってその街を離れ、放浪の旅に出た」[28]という見解も存在する。

いずれの見解にも理があるが、後期形では家族事情およびジョバンニが母の世話で苦労することが重点的に書かれることに注目すれば、父の帰還は、ある意味では、母の世話という家族の束縛からジョバンニが自由になる契機になったと考えられる。ただジョバンニは家に戻るにせよ、戻らないにせよ、変容し続ける「銀河鉄道の夜」について考える際、物語の未完成性を認めるのは、恐らく不可欠な視座だと思われる。

本稿の分析によれば、「銀河鉄道の夜」はブルカニロ博士の実験記録から、ハッピーエンドへ収束する初期形〔三〕に辿りつき、それから登場人物の設定が大きく変更され、結末が開かれている後期形までに変身した。このような変容に伴い、「銀河鉄道の夜」には、多様な解釈が提供されている。しかも、当作品の未決性を考えれば、「銀河鉄道の夜」の物語はまだ終っていない。父が帰ってくるというハッピーエンド、あるいはカムパネルラを失うという悲しい結末にも収まらない。ジョバンニは、まさにこのような身近の人間の消失と回帰の中に、新しい人間関係の再構成を迎えるのである。家族だけではなく、後期形前半に描かれた、級友たちから逃れようとするジョバンニは、銀河鉄道の旅を経験してから、カムパネルラのことについて、「ぼくはカムパネルラの行った方を知ってゐますぼくはカムパネルラといっしょに歩いてゐたのです」[29]と、他者に語ろうという積極的な姿勢を持つようになる。ジョバンニのこのような変容は、ザネリをはじめとする学校の級友たちとの関係が、改善される可能性への期待をもたらすだろう。無論、「銀河鉄道の夜」の物語は如何に続くのかという問いに対して、解答の多様な可能性は、その未完成のテクストの変容に潜在しているとしか言えない。これは「銀河

鉄道の夜」の物語に潜在する未決性である。この未決性が浮上しているからこそ、「銀河鉄道の夜」に対する解読は、より一層の広がりを見せるだろう。

（えん　けい・言語文学専攻）

注

1 以下「新校本全集」と略称する。

2 推敲過程に関しては、入沢康夫監修・解説『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の原稿のすべて』（宮沢賢治記念館、一九九七年）を参照。

3 松澤和宏「『銀河鉄道の夜』――初期形、後期形、決定稿」『宮沢賢治Annual』第九号、一九九三年、一一二頁

4 初期形〔一〕、二〇頁

5 初期形〔一〕、二八頁

6 初期形〔二〕、一一五頁

7 初期形〔二〕、一三〇―一三一頁

8 初期形〔二〕、一三〇頁

9 初期形〔三〕、一三三頁

10 初期形〔三〕、一三八頁

11 初期形〔三〕、一四四頁

12 後期形、一五〇―一五一頁

13 中村文昭「『銀河鉄道の夜』＊陰画としてのザネリと鳥捕り」『童話の宮沢賢治　太母、子供ハ人間ノ父』洋々社、一九九二年、五三頁

14 吉江久弥「ブルカニロ博士はなぜ消えたか――『銀河鉄道の夜』成立をめぐって」『武庫川国文』第四一号、一九九三年三月、四四頁

15 別役実「父としての鳥捕り――『銀河鉄道の夜』　その5」（『イーハトーボゆきの軽便鉄道』白水社、二〇〇三年）を参照。

16 後期形、一四三―一四四頁

17 鳥捕りの殺生のイメージについて、西田良子「『銀河鉄道の夜』論」（『宮沢賢治論』桜楓社、一九八一年）、及び吉本隆明『宮沢賢治』（筑摩書房、一九九六年）における鳥捕りが殺生戒を犯しているという指摘を参照。

18 後期形、一五〇頁

19 後期形、一二四頁

20 入沢康夫監修・解説前掲書（八二頁）、『【新】校本宮澤賢治全集　第十巻　童話［Ⅲ］校異篇』（筑摩書房、一九九五年、一一〇―一一一頁）を参照。

21 後期形、一二八頁

22 初期形〔三〕、一三五頁

23 同前

24 後期形、一三二頁

25 後期形、一七一頁

26 入沢康夫、天沢退二郎『討議『銀河鉄道の夜』とは何か』（青木社、一九七九年、六〇頁、一五六頁）を参照。

27 押野武志「賢治のセクシュアリティ」『宮沢賢治の美学』翰林書房、二〇〇〇年、一四八頁

28 別役実「おわりからはじめる――『銀河鉄道の夜』　その1」前掲書、二〇三頁

29 後期形、一七〇頁

【付記】宮沢賢治テクストの引用は、『【新】校本宮沢賢治全集』（筑摩書房、一九九五―一九九六年）第十巻（初期形〔一〕、〔二〕、〔三〕）、第十一巻（後期形）に拠った。また、ルビは適宜省略し、旧字は新字に改め、仮名遣いについては出典の表記に従った。なお、本稿は二〇一四年三月十五日に行

われた日本近代文学会北海道支部例会での口頭発表を基に執筆したものである。